皐月（さつき） 第724号

むなかた

目次

若布献上 7
刀剣奉納 7
宗像大社春季大祭 6
新入職員紹介 5
漁民と神様 4
神宝館だより・みこころ 4
宗像大社歌会詠草 3
御造営奉賛者御芳名 2

よてす　日本は、国土の七割が森林に覆われる自然豊かな国だ。四季がはっきりとあり、季節毎に様々な表情を見せる。古来日本人は、自然を征服するのではなく自然と共生してきた。里山もその例であり、人は自然の回復速度を超えない程度で手を入れ、その恵みを享受した。手入れされた自然環境には、多様な生物が生息した。しかし、里山は戦後の高度経済成長以降荒れ果てることになる。先日、テレビで作家　故C・Wニコル氏が行った森再生を見た。氏は、荒れ果てた日本の森を憂い、一九八〇年代中頃、長野県黒姫の森を買い取り、再生を始めた。間伐等適度に手を入れることにより、森は甦った。陽光が地面にさす森は美しく、多くの生物も住むようになったという。当社辺津宮の杜（もり）は、昭和四十年代に行われた「昭和の大造営」で整えられた。以降、ほぼ手つかずの状態であったが、風通し良く陽光のさす森を目指して昨年より間伐等を始めた。辺津宮の杜では今でもホタルを見ることができるが、もっと多くの生き物が住む豊かな杜にしたいと考えている。（松）

第五十九回　若布献上
昨年に引き続き陸送により献上

新型コロナウィルスが猛威を振るい一年余りが経過し、二度の緊急事態宣言が発出された。二回目の宣言が三月二十一日に解除されたが、依然として社会情勢が不安定なことから宮内庁との協議の結果、残念ながら本年も若布献上を陸送にて行うこととなった。。

四月十三日午前十時、辺津宮本殿にて若布献上奉告祭を斎行。葦津宮司以下随行神職、宗像大社海洋神事奉賛会会長・桑村勝士氏、宗像漁協副組合長・田志覚氏、神社総代・島田隆士氏、福岡運輸(株)業務推進部・浦田昭蔵氏らが参列し、皇室のご安泰と聖寿の長久万歳、又、陸送による献上が無事に行われるように祈念した。

祭典後、献上若布は、創業者である富永シヅ氏のご子息が宮内庁侍従職の御用掛として勤めていた冨山一郎氏に師事し、皇太子時代の上皇陛下のご研究助言者、相談相手であったご縁をもつ福岡運輸のトラックに積み込まれ当社を出発した。

十五日午前十時　皇居・乾門より参内し、賢所・天皇皇后両陛下を始め各宮家へ献上申し上げた。

刀剣奉納

刀匠・上田祐定（すけさだ）が手がけた日本刀

四月三日、宗像市内の崇敬者より刀匠・上田祐定氏が手がけた日本刀一振が奉納された。

当日は、午前十時三十分より辺津宮本殿にて奉納奉告祭を斎行。刀を打った備前長船（びぜんおさふね）日本刀製作所代表　上田範仁（刀工名　祐定）氏他、関係者らが参列し、神前に刀を奉納した。

今回、奉納された刀は有明海（玉名市から大牟田市沿岸）で採取された砂鐵を使い自家製の玉鋼から生まれたものである。

備前長船日本刀製作所（同所HPより抜粋）

餅鉄（もちてつ）と全国各地の砂鉄を使い、たたら製鉄（日本古来の製鉄方法）で玉鋼（たまはがね）という刀の材料である鋼を作り、日本刀を作っている。たたら製鉄によって出来た玉鋼を使用することで刀の斬れ味の良さと、地肌（じはだ）・刃文（はもん）の模様が特徴的。

日本でたたら製鉄を行えるものは少なく、ほとんどの刀工が協会（日刀保たたら）の同じ鋼を使用しているため似たような刀の斬れ味、地肌、刃文となる。

各地域によって砂鉄に含まれる成分が異なるため、砂鉄を組み合わせてたたら製鉄を行うことは難しく、長年の培ってきた経験とデータ、科学的な成分研究による知識が必要となる作業。その為たたら製鉄を行う人でも、ひとつの地域の砂鉄だけでたたら製鉄を行う人がほとんどである。

また、外国産の鋼や砂鉄を使用しておらず日本産の砂鉄のみを使用している事も特徴としている。

奉納刀に使用された砂鉄

神前に奉納された日本刀

奉納された日本刀の刃身

宗像大社春季大祭

辺津宮春季大祭
四月一日(木)・二日(金)

辺津宮春季大祭は、桜満開で春爛漫の気候のなか主基地方風俗舞が奉奏され、氏子を代表して、吉積公美氏が奉幣使をつとめ、秋の五穀豊穣を祈る大祭が執り行われた。

昨年に引き続き新型コロナウィルス感染拡大防止の為、参列者席の拡幅、直会の中止などの対策を講じた。

翌二日は、福岡縣護国神社宮司田村豊彦氏をはじめ宗像市・福津市の遺族関係者参列のなか宗像護国神社にて春季大祭を斎行。また高宮、第二宮・第三宮において春季大祭を斎行。

その後、辺津宮春季総社祭では玄海中学校女子生徒による浦安舞が奉納された。

沖津宮中津宮春季大祭
四月二十六日(月)

沖津宮中津宮春季大祭は毎年、旧暦の三月十五日に斎行している。また玄界灘の沖合に位置する沖ノ島は、定められた日に渡島することが困難であることから、沖津宮の春秋の大祭は沖津宮遙拝所にて斎行されている。

当日、島内に鎮座する厳島神社、御嶽神社、沖津宮遙拝所にそれぞれ神職が赴き祭典奉仕の後、中津宮にて大島の氏子参列のもと、氏子を代表して中村真一氏が奉幣使をつとめ、巫女による浦安舞が奉奏され春季大祭を執り修めた。

玄海中学校女子生徒による浦安舞奉納(辺津宮春季大祭)

新入職員紹介　①特技(趣味)　②奉職理由　③抱負

岩澤　凛 いわさわ・りん

①お菓子作り、語学勉強(現在、韓国語・中国語を勉強中)
②過去の神社での奉仕経験からやりがいを感じたから
③先輩方を見習い笑顔を大切にし、気品ある巫女になっていきたいと思います。社会人として、宗像大社巫女として恥ずかしくないよう奉仕していきたいと思います。

三重野 光咲 みえの・みさき

①料理が特技、趣味は音楽・映画・アニメ鑑賞
②誰しもが経験できない巫女に憧れを持ったから
③参拝者との関わりの中で、丁寧で親切な応対はもちろんのこと、人間として成長できるよう奉仕したいと思います。

福田　優羽 ふくだ・ゆう

①ギター演奏、ゲーム、読書
②幼いころから、茶道や書道など日本の伝統文化に触れてきて、その中心でもある神社の落ち着いた、優しい雰囲気の中働きたいと思ったから
③参拝者の方々に気持ちよく参拝していただけるように笑顔で頑張ります。

越智　洋 おち・ひろし

①魚釣り
②中津宮奉仕の社家として代々大島に居住していた家柄のため神職を志しました。祖父と父は宗像祖霊社にて奉仕していました
③15年間、太宰府天満宮で奉仕した経験を活かして、氏子崇敬者・祖霊社信徒会の皆様や地域の為に貢献できるように努めて参りますのでご指導よろしくお願いします。

漁民と神様 1

宗像海人族　権田（ごんだ）　幸祐（こうすけ）

初めまして。私は宗像市鐘崎で漁師をしています権田幸祐です。

私の生まれ育った鐘崎は古い時代からここを拠点に海と共に生きてきた集団の暮らす地域です。海との関わり方はその時代で色々と変化しており、狩猟や交易、時には水軍、漁労と様々ですが、どの時代も「海」を中心とした生活を続け、現在に至ります。

父や祖父がそうだった様に、私も自然と漁師になりました。この流れは、鐘崎ではごく自然で、仲間の多くが現在漁師となっています。私を含め、そんな人々が鐘崎を拠点に生活をし、地域を形成しています。そんな地域だからこそ、独特の文化や考え方、言い伝えがあり、海との関わりの中での信仰があります。

そんな私の幼少の頃の思い出を少し。

それは今は亡き祖父が船長をしていたので、今から30年程前の出来事でしょうか。父と祖父の乗る船の出航を、家族で見送った時の事です。出航準備を終えた船は離岸体勢に入ろうとしています。操舵室に見える祖父の顔が普段とは違い、ピリピリしている様子。「早よー船にのらんかー」と操舵室から父を急かします。「ワシャワシャ」と大きく硬い手で私の頭を撫で、「行ってくるけんな。」と父は船に乗り込み、岸壁に繋いであったロープを解きます。離岸と同時に祖母がお清めの御潮井を撒き両手を合わせていました。隣の母を見ると同じようにしていたので、私も手をあわせます。船は一度出漁すると、ひと月程帰って来ませんので私は既に帰りを待ちわびながら…。

船が港を出るのを確認した後、航海の安全と豊漁を祈願する為に鐘崎の岬の先端にある織幡神社へ向かいました。

その麓に着いた時、まだ沖合へ向けて大きなしぶきを上げながら進んで行く父と祖父を乗せた船が見えました。

船が波にスッポリと隠れる度に、もう船が姿を現わさないのではないかと、恐怖と不安で一杯になりながら船をずっと見ていました。「いつまで見よくとね。寒いけんはよお参りにいくよ。」祖母から促され織幡神社の本殿へ向かいます。本殿へ向かう石段を上る最中「お父さん達は大丈夫やろか?」と、つい出た問いに「ここから神様が見守ってくれとるけん大丈夫と。」と優しく答えてくれた祖母。「あんたがお利口にしとったら神様もお願い事を聞いてくれるとばい。」と続けます。私は一気に石段を駆け上がり神様に手をあわせました。遅れて祖母や母が到着した時には、さっきまでの恐怖や不安は消え去っていた様に思います。

どれだけ技術が発展しても何が起こるかわからないのが海。臨む側にとっても、待つ側にとっても、身近な神様の存在はとても大きいのです。

背景の写真は織幡神社麓の岸

神宝館だより 49
八万点ノ国宝収蔵

修理でよみがえった神宝―雛形鉄刀

今回から令和二年度に修理が完了した神宝を紹介する。まずは雛形鉄刀。修理では、肉眼で見えない亀裂への錆の発生が原因で、樹脂含侵時に分離して苦労したが、状態の安定化と強化が叶った。

雛形鉄刀は鉄刀のミニチュアで、沖ノ島国家祭祀特有の品として知られる。類例がないため特徴の定義づけが難しいが、実用の刀と違い、刃がないことが推測されており、刀身から茎（なかご）部へ向かって身幅が広くなる例や、刃部（じんぶ）側の刀身と茎の境目が丸みをもって窪む例なども特徴となる可能性がある。

沖ノ島祭祀では、五世紀以降、豪華な実用品をミニチュア化した金属製雛形品が多くささげられた。特に七世紀には、武器・工具・円板（えんばん）・器・紡織具・楽器など内容が最も豊富になる。これらは、律令祭祀（律令という国家法典に基づいて行われた国家祭祀）が整えられていく中で神へささげる祭具として新たに考案されたもので、雛形鉄刀は五・六世紀頃に奉献品としてあらわれ大量にささげられた。

八号遺跡出土の本品は、長いもので四〇㎝弱を測り、なかには長さ約二〇㎝ほどで茎が長く刀身が細長いものもある。近ごろ、前者は五世紀に宗像地域にみられる特異な小型大刀、後者は同じく五世紀から宗像地域にあらわれる刀身が細長い特殊な刀子（とうす）であるという指摘がなされた。以前から一部は鉄刀子ではないかという見方があったが、新たな見解により、雛形鉄刀の定義の検討と資料自体の見直しが問われてきている。（福）

雛形鉄刀。左端が小型大刀、右側2点が細長い刀子と指摘された（8号遺跡出土）

みこころ

桜が散り、だんだんと気温が高くなるにつれ、春から夏へ季節の移ろいを感じます▼5月の行事の一つとして、第二日曜日に母の日があります▼日ごろの感謝の気持ちを伝え、カーネーションを贈る習慣がありますが、カーネーションの色によって意味合いが変わる事をご存知でしょうか▼メジャーな赤色は、「母への愛」「純粋な愛」という意味になりますが、今回私はピンク色と青色のカーネーションを皆様にご紹介したいと思います▼ピンク色のカーネーションは「暖かい心」「感謝」、青色は「永遠の幸福」という意味が込められ、母への感謝と幸せでいてほしいと願いが込められています▼日ごろ家事や育児をする母に、ここまでのびのびと育ててくれた事に感謝を伝え、これからも家族仲良く過ごせたらと思います▼少し照れくさい気もしますが、皆様も母の日に、感謝の気持ちを伝えてみてはいかがでしょうか。（柳）

第717回 宗像大社歌会詠草

■大西晶子選　■毎月25日〆切

中空と節でしなやか日本竹今だけここだけわが身だけ　早川　祥三

語呂の良さで読ませることを意識した歌。中が空っぽの竹に日本をなぞらえ現状を嘆く作者なのだろうか、具体があると分かるのだが。

桜咲き孫高校の教員へ親と同じの職を選びぬ　秋吉　嘉範

孫が初出勤する日の歌か。子と同じ職を選んだ素直さを嬉しく思った作者だろう。三句以降〈両親と同じ職を選びて〉。

暮れ残る雪柳の花ほのじろくはつかにゆれぬしほかぜなのか　佐々木和彦

潮風のなかというので海岸に近い場所なのだろう。雪柳の咲く早春の静かな美しい景が目に浮かぶ。

西欧の青い列車に乗る旅をいつしか想う春の雪の朝　山﨑　公俊

雪の白から雪に映えるヨーロッパの青い列車を連想したのだろうか。季節が春ということからもロマンティックな憧れを感じる一首。

浮きいでし静脈のごと街路樹は舗道もち上げ進みてゆける　吉崎美沙子

道路の舗装を持ち上げ成長する街路樹の根に注目した観察眼が良い。根の力に感銘を受けた作者だろう。三句以下句〈～の根はアスファルト持ち上げ伸びる〉。

わが庭のパンジービオラ春の陽を浴びてうらうらリゾート気分　本田エリナ

春の陽光の暖かさをリゾート気分と表した作者はパンジービオラの仲間になり、並んで春の陽を楽しんでいたのだ。

兄からの小鯛ささ漬珍味なりうす紅の皮食卓に映ゆ　萩原　勉

贈り主の兄への感謝が鯛の色に表れている。ただ食卓に映ゆというよりも〈白き皿に映ゆ〉など焦点を絞る方と説得力が増すだろう。

光る眼でわれの携帯奪い取り自撮りするのは三歳の坊や　小沢かゆこ

生まれてすぐからスマホを使う親を見て育った三歳、スマホを使いたくて仕方がないのだ。〈光る眼で〉に三歳児の心がうかがわれ、結句で作者の優しさが見える。

◆選者詠

新キャベツ煮たるスープの一杯に慰謝のやうなる野菜のあまみ

マスク下げ息ふかく吸ふ住宅街で咲くレモン見て

第687回 俳句

紅梅のひらりと風にうばわれり　早川　祥三

御造営奉賛者御芳名

（令和三年三月）（順不同・敬称略）

一〇、〇〇〇円

半田市　犬飼　亮

五、〇〇〇円

宇部市　軸屋　進介
北九州市　藤崎　真義
北九州市　河村　靖彦
久留米市　宗重　隆寛
草加市　合志香奈子
高槻市　五十嵐一博
調布市　井樋ふうか
福岡市　土井本　渉
福岡市　今村　俊吏
福岡市　冨安　睦子
武蔵野市　松島　良平

三、〇〇〇円

大阪市　福地　昭義
古賀市　寺田　千春

二、〇〇〇円

泉佐野市　矢野　雄士
鎌倉市　坂井　祐介
北九州市　渡橋　豊
北佐久郡　有働曙藍子
北佐久郡　有働外詢央
北佐久郡　有働　哉亨
神戸市　畑中　秀樹
豊橋市　石原　博子
西宮市　高橋　大補
練馬区　髙橋　弘子

5月 まつりごよみ

1日	総社月次祭	午前11時
	引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭	
	宗像護国神社祭	
5日	五月祭・浜宮祭	午前10時30分
	五月祭 於：宗像市江口 五月宮	
	浜宮祭 於：宗像市神湊 浜宮	
15日	総社月次祭	午前11時
	引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭	

編集後記

御縁をいただき千駄ヶ谷の国立能楽堂で能の観劇の機会を得た▼能は継承される演劇としては世界最古といわれる日本独自の舞台芸術で、世界無形文化遺産に指定されている。芝居のみならず、舞や歌の要素ももつ音楽劇であり能面をつけて演じられることもあり、仮面劇ともいわれる▼今回は志賀海神社（福岡市東区志賀島鎮座）に伝わる社伝謡曲「わたつみ」を能として復曲されたものであった。その動きや言葉で感情を読み取っていくため難しい一面もあったが、非日常の空間に身をおき伝統芸能をゆっくりと観劇することは、貴重な経験でありその所作の一つ一つに魅了されるばかりであった▼私たちにも、神前における作法がある。それは「心が容（かたち）を表わし、容（かたち）が心を表わす」といわれる。敬神の心は作法をはじめ祭祀の厳修でしかないのである。と再認識した一日であった。（黒）

宗像大社

2021年5月1日発行（月刊）／宗像大社 〒811―3505 福岡県宗像市田島2331 電話（0940）62―1311（代） https://www.munakata-taisha.or.jp/